本当はこわい「秘密保全法」市民集会

３月９日(土)、群馬弁護士会主催の「秘密保全法」市民集会が前橋で開催されました。「秘密保全法」がマスコミでほとんど取りあげられていない中で、２００名近くの弁護士、マスコミ関係者、市民がこの市民集会に参加しました。

まず、清水勉弁護士（日弁連）から「秘密保全法」（案）の内容と問題について説明がありました。法案の骨子は国が「外交」「防衛」等の国家情報を「特別秘密」として指定する権限を持ち、それらの漏えいや取得に関連する行為に対する厳罰化をはかる、というものです。情報公開の流れに逆行し、国民の知る権利を制限・抑圧する内容を持っている。

次に、映画「密約」ドラマ「運命の人」のモデル西山太吉（元毎日新聞記者）氏が「なぜ、いま、秘密保全法制なのか」と題して講演を行いました。沖縄密約の歴史の生き証人である西山氏の話をお目当てに参加した人も、多かったのではないかと思われます。

西山太吉元毎日新聞記者

西山氏は１９７１年の沖縄返還の際に日本政府が４００万ドル肩代わりするという密約の情報を得て、紙面で密約を追求、やがて西山氏が告発した密約は国会で取りあげられましたが、時の内閣は言を左右にして密約の存在を認めませんでした。ところが、２５年後の２０００年になって初めて米国立公文書館で沖縄密約を裏付ける文書があることが確認されました。そして、沖縄密約がその後の日米関係の中に今も生き続いている。さらにアメリカ軍と自衛隊との軍事的一体化がはかられ、それが日本にとっての最大の国家秘密となっている。その国家秘密を国民に絶対知らせないために「秘密保全法」が必要になると、明快にこの怖い法律の背景を明らかにして講演を締めくくりました。

最後のパネルディスカッションは清水・西山の両氏に、宮崎岳志（元上毛新聞記者・前衆議院議員）、我らが内藤真治（元高校教師）、佐藤圭（東京新聞特別報道部記者）の３氏が加わって行われました。宮崎氏は尖閣での中国漁船のビデオテープ流出事件、秘密が多いほど不正が多く行われていること、佐藤氏は「秘密保全法」の取材を通して議事録もとらない有識者会議の実態、秘密が多いこと、内藤氏は先の戦争の終結についての歴史的事実と教訓、情報（秘密）が一部の支配者に握られることの恐ろしさ、等々、「秘密保全法」についてそれぞれの立場から発言がなされました。最後に内藤氏からマスコミ関係者に、この法案の直接の当事者となるマスコミ関係者を励まし、育てるような取り組みが必要ではないかというエールが送られました。（赤石竹夫記）

フォーラム運営委員の内藤真治さんが
パネラーとして参加（右）